

当院看護婦（士）の看護の質の向上に対する取り組みを明らかにする

6階東病棟

○仁井田恵子・坂本 美和・下元 理恵
竹内 真弓・森山 陽美・上田 理絵
古谷 聡子・森 郭子

I. はじめに

我が国は脱高度成長と人口の高齢化により経済不況という問題を抱えながらも、質的变化を目指さざるを得ない状況へと社会全体が変化をしてきている。この事は保健医療の中へも大きな影響をもたらしており、今日看護の質も問われるようになってきた。

看護の質の向上にむけて、高田による「看護ケアの質を考える」や看護QA研究会による「看護ケアの質の測定用具の開発」など、実際行った看護を評価する研究やその評価を行うための研究が数多くなされている。看護職内部でも専門職としての看護の質的向上を目指し、病院における看護の機能に関する自己評価マニュアルが日本看護協会によって作成され、普及がはかられるなど看護ケアの質に関する自己評価活動への啓発がなされるようになってきた。

当院看護部でも「看護の質の向上」が目標に掲げられており、個人・病棟及び院内を上げて様々な取り組みがなされている。しかし、私達はこのような状況にありながら、各個人がどのような考えで看護を提供し、看護の質の向上に向けてどのような取り組みを行っているのか疑問に感じた。

この事を明らかにすることで、専門職としての看護の質的向上を目指すための自己啓発や意識改革、動機づけとなることを願い、アンケート調査を行ったのでここに報告する。

この研究において私達は看護の質を以下のように定義した。高田によると「Donabedian はQA（質の保証）を『構造』『過程』『結果』という相互に関連しあう3つの構成要素からなるプロセスである」と提唱している¹⁾。これをもとに私達看護研究グループは「構造」「過程」「結果」の3つの要素が互いに関連しあうこととした。

II. 研究方法

1. 調査期間：平成10年8月28日～平成10年9月14日
2. 対象：当院看護婦（士）41名

5階西病棟と6階西病棟及び本研究グループメンバーを除く6階東病棟の計3病棟

3. 回収者数及び回収率：41名中36名(88%)の回収が得られた。

4. 調査方法：アンケート調査〔無記名、自己記載方法、アンケート内容(表1)〕

5. 分析方法

表1 看護の質の向上に関するアンケート内容

Aの結果はKJ法を使用し、中カテゴリー化としB・Cの結果は集計化とする。

	内 容
A-1	あなた自身、看護の質向上をしなければならないと思うのはどの様な時か
A-2	あなた自身、何を改善すれば、よりよい看護を提供できるか
A-3	あなた自身の看護の質向上において障害となるものは何か
A-4	あなた自身、よりよい看護の提供のためにどのような取り組みをしているか その取り組みを継続する難しさは何か
A-5	あなた自身、どのような時に看護の質が向上したと思うか
A-6	あなた自身、よりよい看護の提供のために今後どのような事をしたいと考えているか
A-7	あなた自身、看護の質というものをどう考えるか
B-1	あなたの病棟で、看護の質の向上に向けてどのような取り組みをしているか
B-2	あなたの病棟で、その取り組みをする中での難しさにはどんなものがあるか
B-3	あなたの病棟に、看護の質を評価する基準はあるか
C	看護の質の向上に向け、今後病棟や病院でどのような事をして欲しいと思うか

Ⅲ. 結果及び考察

A-1、A-2、

A-6の結果から、知識不足、経験不足、技術不足を感じている人が多い。又、A-4の結果から知識の習得をしている人が多く、B-1より実際に病棟において、勉強会やカンファレンス等の取り組みを行っていることがわかる。しかし、B-2においては業務などでカンファレンス等に出席できない、又カンファレンスや勉強会を開いても意見や集まる人数が少ない、時間不足などの難しさがあるという結果が得られた。このことにより、各個人や病棟、病院全体を見ても現状には満足しておらず、Cの結果からも勉強会や講演会の充実を希望している人が多く見られており、更なる向上を目指している意欲の現れではないかと考える。

又、A-3の質問に対し、業務が忙しく余裕がない、知識不足等という結果が得られた中で、向上心がないという回答があった。しかし、向上心がないと答えた人がA-4では何もしていないという回答はしておらず、知識の取得、患者の共有、患者とのかかわり等を行っており、何らかの形で看護の質の向上に向けて取り組みをしている。これは、「患者のニーズに応じきれない自分自身への不満、世の中全体の高学歴化と自分自身を比較しての焦り等がある」²⁾と栗原がいつているように看護婦という職業が高度な知識と技術を要求される職業であるためだと思われる。そして、よりよい看護を提供するためには、自分自身が時間の使い方を改善してゆけばできると考えているが、障害となるものでは業務が忙しく、時間の余裕がないという答えがある。これは、業務が忙しいから患者中心の看護が提供できない、あるいは業務が忙しいから自分の一日の行動計画を立てても思うような看護が提供できないと考えていると思われる。

私達は、普段から口癖のように「忙しいから」をいいわけのように使用している。そして、患者からの「忙しそうだから」という言葉に甘えている部分もあるかもしれない。看護婦（士）は毎日多くの業務をこなし日々の業務の中から様々なものを見出し、よりよい看護を提供しようと努力している。では、時間的余裕があればよりよい看護が提供できるといえるのであろうか。看護婦（士）は患者とゆっくり接する時間がなかなかとれないというが、特別にわざわざ患者の話しを聞くという時間を作らなくても、ちょっとした機会に声をかけるということが、患者にとっては話せたと思えるのではないか。これは患者に関心をよせ、患者に近づいていこうという姿勢がいかに大切であるか、また患者が話したいことを話せるようなきっかけをつくるのが、大きな意味をもつと考える。しかし、それだけではよりよい看護を提供できるとはいえない。

高田によると、『Donabedian は看護の質保証を「構造」「過程」「結果」という、相互に関連しあう3つの構成要素からなるプロセスである』と提唱している¹⁾。A-5では患者の満足、看護婦の満足するケアが出来た時など、A-7では患者個々に応じた看護が出来る、看護婦個々の知識・技術のレベルアップ等という結果が得られた。これらは看護の質の3要素のうち、「過程」「結果」の部分に関する回答であり、「構造」に関する回答はなかった。これは、実際に患者に関わることで評価が得やすく、個人で改善していける部分が大きいためではないかと考えられる。しかし、Cの結果を見ると「構造」の部分であるスタッフの増員、病棟の構造上の問題、勤務体制という回答がみられる。Aの結果で「過程」「結果」に関する回答しかなかったのは、「構造」の部分には病院経営にも関わることもあり、個人的に介入しにくい部分があるため、「構造」に関する回答は得られることができなかつたのではないかと考える。

以上のように、個人として考える看護の質は「過程」「結果」という2つの要素しか得られないが、病棟・病院に望むものとしては「構造」の部分の回答が得られている。個人単位と病棟・病院単位という視点の違いからこの結果になったと考えられるが、アンケートの回答全体をみると、看護婦（士）個々の視野には看護の質の3要素が捉えられているといえる。

V. おわりに

今回、私たちは看護の質の向上に対する取り組みについてアンケート調査を行った。その結果、個人・病棟でどのような考えで取り組みがなされているか知ることができた。柴田らは、「看護ケアの質を構成する要素の検討の中で『看護婦の姿勢』を重要視しており、看護ケアの質を構成する要素の中に挙げている」³⁾。今回私達の研究によって、

現在の看護の質の向上に対する取り組みに関する看護婦（士）の態度や姿勢について、対象者数は少なかったが、明らかにすることができたのではないかとと思われる。このことから、この研究結果が看護の質の向上を考える新たな機会となり、自己啓発・意識改革のきっかけとなることを期待している。

引用・参考文献

- 1) 高田早苗：看護ケアの質を考える，看護学雑誌，58（2），p114 - 121，1994.
- 2) 栗原知女：いま学ばずにはいられない、時代は生涯学習，看護学雑誌，2（57）p114 - 125，1993.
- 3) 柴田秀子他：看護ケアの質を構成する要素の検討—量的調査を用いて，看護研究，28（4），p41 - 53，1995.
- 4) 看護 QA 研究会：看護ケアの質の測定用具の開発 1～4，看護管理，（3），1993.
- 5) 内布敦子他：看護ケア構造指標の開発と検討，看護研究，31（2），p9 - 20，1998.
- 6) 内布敦子他：看護ケア構造指標の試用と検討，看護研究，31（2），p21 - 28，1998.
- 7) 山本あい子他：看護ケア過程指標の開発，看護研究，31（2），p29 - 35，1998.
- 8) 山本あい子他：看護ケア過程指標の検証，看護研究，31（2），p37 - 57，1998.
- 9) 近澤範子：看護ケア結果指標と測定用具の開発，看護研究，31（2），p59 - 69，1998.
- 10) 内布敦子他：看護ケアの質の要素の抽出—デルファイ法を用いて，看護研究，27（4），1994.
- 11) 岡谷恵子：看護ケアの質の評価の日本的展開，インターナショナルナーシングレビュー，18（3），p6 - 14，1995.
- 12) 河口てる子他：日本赤十字看護大学卒業生における自己教育性と進学意識の関係，日本赤十字看護大学紀要，（9），p82 - 93，1995.
- 13) 佐々木幾美：看護系大学教育を受けた卒業生の看護教育に対する意識調査—研究枠組みの作成，日本赤十字看護大学紀要，（9），p94 - 102，1995.
- 14) 塚田トキエ：働きながら学ぶ人を応援しよう！，看護学雑誌，2（57），p136 - 138，1993.
- 15) 後藤裕子：看護を変える継続教育，看護管理，2（1），p62 - 69，1992.
- 16) 近澤範子：看護ケアの質の評価に関する文献検討，看護研究，27（4），p70 - 79，1994.
- 17) 大川貴子：看護を患者と共有するために，看護学雑誌，58（4），p318 - 321，1994.